

哲学・思想をベースにしたスポーツ史の構築

竹谷 和之 (TAKETANI Kazuyuki)

Construction of Sport History based on Philosophical and Thoughtful Perspective

はじめに

バスクとはバスク語でエウスカル・エリア（バスク語を話す地域）を指す。そしてその地域に居住するバスク人をエウスカルドゥン（バスク語を話す人）と言う。言い換えれば、地域文化を中心にした（シモーヌ・ヴェイユ『根をもつこと』）価値観を共有する人々の集まりがバスクということである。スペイン2州4県（ナファロア州ナバラ県、バスク州アラバ、ギブスコア、ビスカヤ県）、フランス3地方（ラプルディ、低ナファロア、スベロア）がバスクとされている¹⁾。バスク語を中心に据えることには異論はないが、バスク語を話せないバスク人やバスク語にこだわらないバスク人も多くいる。これまでのバスクの定義が該当しないケースも出てきており、今後「バスク」の多様性をいかに表現するかが問われている。

フランコ独裁時（1939～75）には、バスク語やバスク文化の公の場での使用禁止令により、屋外でのコミュニケーション手段が遮断された。その結果、生業維持のためバスク語を放棄した人々も多くいたのである。その子どもたちは当然スペイン語のみで生活を送らざるを得なかった。また、バスクの将来のために教育に熱心な母親たちによる、地下活動として官憲の手を逃れながら私設教室が毎日場所（マンションの一室）を変えて行わ

れたりもした。教室を支えていた女性の言によれば、見張り役を立てて密かにバスク語の読み書き、歌などが教えられ、それが現在のイカストラ Ikastola という民族学校へと発展したのである。今でも公教育とは異なる位置づけであるが、バスク州政府補助金による学校運営をしているところもあり、半ば公教育の立場にある²⁾。上はほんの一例であるが、フランコによるバスク弾圧は文化を根絶やしにすることであった³⁾。

しかし例外もあった。フットボール競技場ではバスク語会話が認められ、多くの観客が訪れた。それと平行してバスク伝統スポーツ競技場（主に



写真1 監視下での丸太切り
(1966年3月6日、アノエタ・サッカー場)
Aguirre Franco, R., Enciclopedia general
ilustrada del País Vasco, Auñamendi, 1978,
p163.

闘牛場や村の広場)でも、警察の監視下ではあるが、バスク語が使用可能であった。写真で見える限り、伝統スポーツの試合には立錐の余地のないほど多くの人々が観戦し、勝敗の行方を見守っている。逆に言えば、体制側の思惑が伝達できる時空間でもあったといえる。

資料の残されていないバスク文化史を語るときには断片的事実をつなぎ合わせて独自の論を展開せざるをえない。これは他の歴史的テーマでも同様のことである。そのためには資料の存在が決め手になると言われてきたが、ランケ史学の資料実証主義の限界が指摘されて久しい。つまり資料として残されている内容は、誰が何を目的として書いたのか、ということ常を念頭に置いて使用すべきであることは当然とされている。歴史叙述には意図的に隠蔽・排除されたものが存在するし、何故にその行為が正当性を持つのかということも問題視されねばならない。筆者のように日本に住居してヨーロッパのバスク伝統スポーツにアクセスすることは、異文化理解という難解な過程を通せざるを得ない。したがって文化解釈の基点はバスクに寄り添いながらも当然日本で培ったものの見方である。在外研究を含め頻繁に現地滞在を繰り返してもなお不十分なのは、バスク人による言語で表現されない過去の存在である。また多くの文献では、資料不足を理由にそれを取り上げて議論を展開されることはない。そこへ踏み込んで明らかにすることは、とりもなおさず語られないバスク人の文化領域への侵入となる。バスク伝統スポーツの過去に介入し再構成をする場合、当該研究は著者の確固とした哲学や思想がなければ到底到達できるものではないし、そうしなければ歴史的叙述を繋げるだけで外部の人間の単なる興味本位の叙述になってしまうであろう。バスク人が「いかに生きるか」を選択してきた過去や現在に向き合うとき、著者の哲学・思想が不可欠であるという前提のもとに本論は展開される。

1. マスターナラティブからの脱却

筆者は1985年よりバスクを訪問し30年が経過した。初期は彼らに伝承されているスポーツ文化の実態調査からはじめ、とくにテニス球戯史とペロタ(ボールゲーム)との関連を模索した。テニス球戯とは近代テニスの原型となりうる球戯の総称としてここでは使用する。

ペロタとの最初の出会いはギブスコア県ベルガラ村という小さな村で、肉の音(硬球を素手で打つ音)がフロントンという球戯場に響き渡り身体が震えた記憶がある。苦痛を我慢せずに国際性のあるテニスに鞍替えした方が良いと思う、と司馬遼太郎も暗に述べているように⁴⁾、素手を頂点にした形態が数多く残存している。ヨーロッパにあった伝統球戯がバスクに残っているだけだという謙虚な発言もあるが、その多形態を維持しうる包容力がバスクにはあるといえよう。ペロタ球戯という名称もテニス球戯に準じて、現在の近代ペロタの前身をいう。

ペロタ球戯史研究の位置づけ

ペロタ球戯史研究にはギルマイスターの『テニスの文化史』は不可欠となった⁵⁾。ヨーロッパのテニス球戯を俯瞰し、その形態の歴史にまで言及して論を展開しているからである。しかし彼のペロタ球戯史叙述に疑問が浮上し、教会古文書などの原典を直接確認した。疑問とは、バスクに存する最古の資料はフランスバスク・ガリ村にある



写真2 ペロタ・バスカ(レポータ球戯)

1629年の墓石に刻まれたペロタ選手のレリーフであるという⁶⁾。また本人に直接確認しても、その年で間違いはないという。しかしそれ以前にペロタをしていたという記述（1331年）がギルマイスター使用の同文献に明記されている⁷⁾。またパンブローナ市の別の教会古文書室には1588年以降の判例も多数残されている⁸⁾。単なる不注意による記述ミスなのかどうか、1629年以前にバスクでペロタ球戯（＝テニス球戯）が存在したことで何か問題が生じるのであろうか。

稲垣はテニス球戯史研究にはペロタ球戯は重要な存在であると主張するが、一向にその進展が見られない状況を憂慮していた⁹⁾。それは英仏が中心として発展させてきたテニス史に一石を投じることになり、修正を越えた「文化帝国主義」批判へと繋がるからである。この視点を踏まえないとテニス球戯史研究は不可能であると言わざるをえない。フェルナンドとボサス＝ウルティアの豊富な資料とバスク語を駆使して編纂されたペロタ史研究は従来のテニス史を採用しつつもバスクへの視点は残している。バスク内をくまなく踏査した当該研究はペロタ研究の原典としての位置づけにある。しかし残念ながらテニスとペロタの直接的な関係は言及されない。これを資料的限界とするのか、それとも何らかの力が働いているのかは不明である¹⁰⁾。ナバラのペロタ史研究者においても記述の不十分さは認識しているが、あえて踏み込むことをせず、静観しているのである¹¹⁾。したがって、テニス球戯史研究では、ペロタ球戯の存在は認めるものの、英仏を中心とした記述に変更はない。ギルマイスターの『テニスの文化史』に修正を加えるならば、叙述の足跡を辿りながらヨーロッパに存するテニス球戯を確認することから始めねばならない。そしてヨーロッパの周縁に位置するペロタ球戯を含むテニス球戯叙述の再評価を厳密にすることである。

ジュ・ド・ポームとの関係

ナバラ県の首都であるパンブローナ市には王室古文書室及び教会古文書室に膨大な資料が残され

ている。すべての資料を検索・閲覧できるように、少人数の司書で少しずつ整理されつつある。ナバラ県はもともとナバラ王国（824～1620）であり、ピレネー山脈を挟んでスペイン側とフランス側にまたがっていた。両国に挟まれた状態はつねに緊張関係を強いられ、また一方で両国の緩衝体ともなっていた。とくにフランス王がナバラ王を兼任することで、人だけでなく文化流入も当然生じていたであろうし、それは王室や貴族の日常生活にも影響を及ぼしていたと考えられる。その一例がペロタ球戯である。1331年の記述には「juego de la palma」と記されており、これは手のひらの球戯「ジュ・ド・ポーム」という意味である。内実は不明だが名称は全く同じであり、その類似性から二つの球戯の関連性が浮上してくる。つまりペロタとジュ・ド・ポームは同一であるという仮説が設定できるのではないか。ヨーロッパには多くの素手の球技が残されており、それらとの関連も視野に入れる必要があろう。

2. 労働からスポーツへ

バスクでは丸太切り、石かつぎ、石引き、草刈り、重り運び、レガッタ、闘羊など労働から派生した伝統スポーツがほとんどである。基本的に二者間で競われるスポーツはまた賭でもある。アギーレ・フランコによれば、二者間の力比べが賭へと発展し、スポーツ競技として現在に至っているという¹²⁾。そしてスポーツ競技であっても賭による争いが度々生じ、ルール化を目指した会合が1979年ドノスティア／サン・セバステリアン市で行われ、スペイン・フランスを問わず共通の基盤が整えられた¹³⁾。1979年はフランコ独裁から王政復帰して4年後であり、また新たなバスク自治州の初年でもあった。公的に認可されたバスクでの最初の伝統スポーツ変革が行われたのである。

スペインバスクでは現在、伝統スポーツが近代化・組織化され他の近代スポーツ競技と同等と見なされ、運営資金なども州から補助される。運営の透明さ・組織化を獲得することによって近代スポーツ競技の仲間入りが可能となった。バスクで

は伝統スポーツが近代スポーツ化されても、コロドールという仲介人が試合前と試合中に合法的に賭を取り仕切る。彼らは州政府が定めた資格を持ち、責任を持って賭の仲介をするのである。一方、フランスバスクでは伝統スポーツは組織化に至らず、公的支援を受けるには競技運営計画を市当局へ毎年申請せねばならない。その手続きの煩雑さから伝統スポーツは個人レベルで運営されている。しかし熱心な人々の協力で、スペイン4県とフランス3地方のバスク伝統スポーツ競技大会は継続されている。

現在、プロのスポーツ選手はヨーロッパでは労働者としての位置づけにある。しかし元来ヨーロッパ（キリスト教信仰）では労働は原罪への罰としての意味があり、償いと読み換えもされている。労働とスポーツ、この相反する二つの身体活動が交わることがあるとは当初奇妙な感覚であった。とくにバスクでは労働は生業であり、木こり、農夫、石材業、羊飼いや漁師などの仕事で生計を立てている、ペロタや九柱戯は例外であるが。その肉体を駆使した力は日常に不可欠であり、生きる精神的支えでもあった。バスクでは、よく走る人、草を速く刈る人、力持ちが尊敬されるといわれてきた。したがって、各人の力は家庭を支えるだけでよかった。それが二者間の力比べへと進展したのである。単なる力比べは古今東西存在すると思われるが、厳しい労働をさらに厳しいスポーツ競技へと変化させる理由が求められよ

う。日常労働では身体的限界を感じれば休憩をとり、回復を待って再開できる。しかし労働をスポーツ競技にすれば、身体エネルギーを最大限駆使して、相手や時間に対処せねばならない。労働スキルの上達のためという名目だけでは理解しがたいのである。この差異をいかに受容するかが大きなポイントとなろう。

バスク人を競技に駆り立てるものとして賭の存在がある。マルセル・モースによれば賭は「富の分散」になるという¹⁴⁾。特定の一部の者だけが潤うのではなく、保持している財産を使って散財することに意味を見いだす。その賭が残存していることは、社会変容が進んでいても、その根底にはいまだ共同体への奉仕（＝富の分散）があることの証左であろう。

隠されたバスクスポーツの意味

バスクでは、現在では日常労働が機械に依存しているとはいえ、その＜スポーツする身体＞には何か別の意味が含まれているのではないかと思うようになった。なぜなら当該スポーツは守護聖人祭などでは必ずメインプログラムとしてスペクタクルの中心に位置づけられているからである。年一度の祭は人々の待ち望む時空間を提供する。普段静かな村に精気をもたらす音楽、友人・知人との再会などとともに、村出身選手の活躍が一層祭を引き立てる。その力の躍動感に内包するものは何であろうか。



写真3 草刈り



写真4 牛の石引き

プロのベロタ選手は基本的には所属している企業が組む試合にも出場しなければならない。しかしスケジュールに余裕があり個人的に招待されれば、祭での試合に出る。その他の伝統スポーツ競技は個人参加が主で、何ら制約があるわけではない。近代スポーツ競技をプログラムに組み入れるためには施設の整備や用具の準備などで財政的に負担が大きい。伝統スポーツは地域にある共同広場やスペースを使用すればよく、また用具なども自己調達可能である。アギーレ・フランコはさらに、単調な日常生活から離れた賭は経済的リスクのスリリングさが魅力として男性に受け入れられ、スポーツに進展したのではないかという。それも可能であろう。個人的競技から、共同体や村を代表する試合へと変化していくとそれぞれの期待を背負うようになる。そして榮譽を手にした者は地域の模範となり、言動が目目され、日常生活に影響が出るようになる。その中から共同体の将来を託せる人物が出来るのである。

3. バスク格闘技マキル・ポロカ

バスクスポーツ研究では長期間、格闘技が見当たらなかった。バスク大学スポーツ科学研究者（人文系）も把握していなかったが、2014年フランス国境近くのスペイン・ギブスコア県オイアルツン村で細々と伝承されている棒術マキル・ポロカを知った。マキルとは棒であり、ポロカは闘いを意味する。バスク学会（Eusko Ikaskuntza）では2014年までには把握されていたが、スポーツ文化研究やフォークロアの対象とはなっていない。

ギブスコア県ではバスク伝統スポーツとして認知されるには組織化して、代表者を決定し運営を明確にしなければならない。近代化過程を通過しないと好事家の趣味あるいは単なる娯楽として見なされてしまい、バスク文化としての継承に障害となるからである。現在はオイアルツン村役場の支援により、体育館使用と用具管理が認められている¹⁵⁾。



写真5 マキル・ポロカ

このマキル・ポロカに関する叙述をバスク語学者イツスエタ（1767-1845）から引用してみよう：

事例1. 「26年ほど前、二人の兵士はベアサイン村バレンダイン地区生まれのホセ・ドミンゴにトロサまで荷物運搬依頼をした。目的地に到着後、再度彼に同じ依頼を強要した。しかし道半ばで日暮れとなった。兵士たちはサーベルを身につけていたにもかかわらず、牛飼い棒の一撃が二人に襲いかかった。ホセは自宅に戻り、唯一の報復として手には短棒を持っていたのである」

事例2. 「ナポレオン軍のスペイン侵入後、サーベルで武装した二人の兵士がトロサ村からエミアルデ村にやってきた。ビダニア生まれのバウティスタが住む農家のニワトリを盗むためであった。まずバウティスタは短棒で反撃した。棒が折れた

ので、妻により太い棒を持ってくるよう頼み、それを手に持つと、折れた短棒を投げつけ、もう一つの棒で兵士の股間を打ち据えた。その間に妻子とともに逃走した¹⁶⁾

二つの事例は護身術として棍棒が使用されており、つねに受け身である。静穏な日常に何らかの外圧があり、相手が複数でも俊敏な動きでそれに応じている。とくに事例1では牛飼いの棒を使用している。これは現在の牛の石引き競技に使用される棒に近似したものと思われ、直径2センチ余りで長さが1.5メートルくらいである。棒の先端に尖った釘などが埋め込まれてあり、時にはそれで牛を突いて仕事をさせることもある。

農家の人々は日常労働で棒の使用に慣れており、緊急時にはそれが武器となるのである。そして俊敏な動きも日常で培われたものである。闘いのための準備ではなく、応用可能な身体技法が日常に溢れていたといえよう。マキル・ボロカ保存会代表曰く、「棒術ができる者は、舞踊もできる」、そしてその逆もしかりという。その身体技法に共通性が認められるのである。マキル・ボロカとバスク舞踊との関連については今後の研究に委ねたい。

4. 権力に抗するスポーツ文化

バスク伝統スポーツを新たな視点で読み解くためには、新たな指標が必要となる。それをスコットの「ゾミア」論に求めたい。

スコットの研究によれば、東南アジア、中国南部、インド北東部の標高300m以上の山地「ゾミア」に居住する少数民族は、本来の領地を追い出されたのではなく兵役、奴隷、徴税、病気、戦争などから逃れるために自ら選択して高地に居住しているという。これまでは権力に従うか、領地を奪われ追い出されたか、あるいは逃げ出したという見方が一般的であった。しかし権力に抵抗するために、自ら進んで移動・移住して生活様式や宗教を保持して生き延びる方法を選択したという解釈は、弱者や少数者からの視点を提供する。

これは「屈服することなく、自律的で、自給自足できる空間を作ろうとしたわけだが、それが危険が続くかぎり外の社会からの独立を宣言するに等しかった」のであり、「一般に居住地が高い場所や奥地にあるほど、国家の中心部や奴隷狩りや徴税からはなれることになる」とされる。この移住者がグループを形成すれば少人数の互助組織が成立し、単独でも可能である。「国家構造のない状態で生きることこそが、人間の標準的状态であった」と言われる所以である。そして「柔軟な適応性を優先」するため、口承で歴史を伝えるのはもちろん、そもそも『歴史を背負った単位』そのものが変化を続けているのであれば、彼らに特権は最低限でよいし、あるいは不要であるとされる¹⁷⁾。自らの意思で高所へと移動して生活を送ることは、「生きる」尊厳を確保する唯一の方法だったのである。

さらに土佐はスコットの「ゾミア」論を発展させて「正義を実現する完全な制度を構想するよりも、制度化された不正義を正す実践」が必要という。言い換えれば、これは中心的な位置にあるマスターナラティブをより一層充実させるということではなく、マスターナラティブそのものを検証することにほかならない。周縁の語りも「世界史の一部」であり、固定された歴史を脱構築する契機と考えられうる。「中央集権化された政府と支配王朝をみても、支配者が系譜や宮廷に関する伝説、詩、叙事詩、賞賛の賛美歌などを通じて、自らの正統性と歴史の長さを主張（または偽造）しようとしたのは明らか¹⁸⁾、権力維持のために歴史による理由付けが求められるのである。

さらに、『マイノリティの生成変化』こそがデモクラシーをラディカルに変革する力があり、これを「野生のデモクラシー」として土佐は注目する¹⁹⁾。ここでいう野生のデモクラシーとは「異議申し立てを続ける運動としてのデモクラシー」とされる。これは『近代国家によって囲い込まれた政治的空間の中に住む我々の中にも息づいている』のであり、視座を変えることによって「見え

ないもの」が見えてくる。「ゾミア」や「野生のデモクラシー」の視座を用いればバスク地方の伝統スポーツ史はいかなる歴史叙述が可能となるのであろうか。

バスク伝統スポーツに内包する「力」

バスクは山バスクと海バスクに区別されるという。しかし低地には権力者を中心とした権力も存在していたので、勢力争いによって分散したと考えることができる。もちろん宗教（キリスト教）の影響もあると思われるがこれについては別稿にしたい。ゾミアとの関連では、スコットの事例と全く同じとは言えないが、山バスクの存在が該当し、とくに農家バセリ（西語：カセリオ）がバスク人に重要な役割を果たしている。バセリはかつては貨幣以外自給できるという自立経済を形成しており、それゆえ家族単位の労働と生活が不可欠であった。急峻な山での生活を想像するのは困難であるが、「国家からの離脱の程度を巧みに調整し、状況に合わせて加減する能力を離反者から構成された社会」²⁰⁾であり、それゆえ状況把握が困難であればあるほど「未開状態とコード化される」²¹⁾のである。

筆者はペロタをはじめバスク伝統スポーツには権力に抗する力が内在化されているのではないかと考えてきた。ローマ時代以降20世紀にいたるまで、バスク人は外部勢力（ローマ、西ゴート、フランク、イスラム、フランスなど）と対峙しながら独自の文化を保持・伝承してきた。バスク語文化圏も当初とはことなり、徐々に狭くなり現在定義されている土地になっている。スペイン国家に吸収され多少の近代化などの文化変容は受け入れつつも、その「空恐ろしい力」は依然として有効である²²⁾。斧で丸太を切る力、100キロ以上の石を担ぎ上げる力、ペロタの硬球を打つ力などスポーツで鍛え上げられた身体および力は、競技大会は言うに及ばず、緊急時には顕在化させ応用可能なのである。フランス・サラ村の広場（ペロタ球戯場）には、ペロタ（素手）・チャンピオンであった英雄ヴィクトール・イツリア（1914-



写真6 ヴィクトール・イツリア



写真7 現在のペロタ・マノ（素手とボール）

1944) のレリーフが設置されている。ボールを打つ瞬間を二重にされ、手榴弾を投擲する優秀な兵士として描かれている。「消尽」としてのスポーツが潜在的な「有用性」（バタイユ）へと移行する瞬間である。

「消尽」は太陽のごとく無目的に燃え尽き変化していくことである。言い換えれば、その消費がもたらすことだけに究極性を持つのである²³⁾。労働からスポーツへと変化したとき、生きる糧を獲得するための力の発揮ではなく、自らの力を使い尽くすことそれは「無目的の消費」に委ねられているのである。それはまた競技に内在する「永遠」＝「普遍」を手に入れることでもある。「消尽」とはこのことであり、それを個人という限定的な範疇を飛び越え、さらに「内的体験」という誰にも再体験できないにもかかわらず「連続性」へと変化していくのである。その「消尽」の中に

「力」を見いだすことはバスケット以外の少数民族にも共通の存在を想起させる。

また日常労働をスポーツ競技にすることで何が継承されるのかということも重要である。地域や家庭の価値観、共有地の管理、技術など、そこには生き延びる技術や即興詩人ベルチョラリによる歴代英雄の武勇も含まれる。即興詩には過去の並外れた力や地域への影響なども織り込まれ、歌い継がれていく。近年は記録として残されるが、口承ではスペクタクルは朗々と歌唱される抑揚に混じって、聴く者の想像に彩りを加えるのである。

マキル・ボロカは実践術としての格闘技である。これをスポーツ化するには、共通の安全第1のルールが必要である。しかも「近代スポーツ」として認可されなければ普及は困難である。しかし保存会代表のG氏はスポーツ化はしないと明言している。マキル・ボロカの勝負はどのような経過になるかが判明しないからこそ魅力があるのであって、近代スポーツ化という譲歩をすれば、格闘技の真髄を放棄するに等しいという。相手が負けを認めるか、それともそれ以上戦えなくなるまで続けられるのである。集中の強度が非常に高く、かつドリルのように繰り返す練習は意味をなさない。咄嗟の動きに呼応する身体の準備が必要なのである。この言葉には、マキル・ボロカの魅力を喪失してまで普及は望まないし、「近代化」をよしとする権力に迎合しない、と読み替えが可能である。つまり権力に抗する思想が根底にある。そして近代スポーツ化とは何かという問いが同時に浮上してくるのである。

5. 哲学・思想をベースにしたスポーツ史

古い地縁共同性から政治的共同性²⁴⁾への移行過程で、紐帯として伝統スポーツ文化が機能し続けるのは何故かを問うときに、いま置かれている状況を把握しなければならない。したがってスポーツ史研究を進めるときには、各研究者が「この世をいかに生きるかを自分の言葉で表すこと」を前提とした歴史叙述を構築すべきであろう。つ

まり各個人の哲学・思想を前面に押し出し、現代社会の中でいかなるスタンスに立つかを主張するのである。

<歴史>とは<現在>とは何かという問いに対する答えである

西谷は「<歴史>が書かれることによってはじめに現実的な拘束力（ないし構成力）をもつ、言いかえれば、遡及的に事実としての<過去=歴史>が設定される。・・・これはとどのつまり、<歴史>とは<現在>とは何かという問いに対する答えである」²⁵⁾と言う。この指摘は非常に重要である。歴史とは、書く者は誰で、なぜ、どのように過去を構成するかということが同時に含まれているからである。著者の全体が表出するのである。そして「歴史が書かれることによってはじめに、過去がある時間的秩序に基づいた過去として定位される」²⁶⁾のである。著者の意図がすでに歴史叙述に関与しているというのである。さらに言えば、著者の生き様が全面的に露出されるのである。「同時に、時間的秩序の内に<現在>を定位すること。それは自分自身が<歴史>の設定する時間の中にはいっている」²⁷⁾のであり、傍観者ではないのである。つまり過去の事象に一定の距離を保ちつつ叙述するのではなく（=参与観察）、そこにある意味や意義をみいだすことは、とりもなおさず著者が現在の思考を採用して過去に向き合うことである（=観察的参加）²⁸⁾。これは過去の再発見ではなく、過去を再構成する著者の思想や哲学が問われているのである。自分の語り出す位置を明確にすることが哲学・思想であるといえる。

その意味ではギルマイスターの『テニスの文化史』はヨーロッパ中心史観（とくに英仏）に基づいた歴史叙述である。周縁に位置するペロタ球戯史（バスケット伝統スポーツ史も含む）は、このマスターナラティブを見直す契機を提示している。ヨーロッパにありながら周縁として扱われ、なおかつスポーツ史叙述に偏向があるならば、まずこのことを念頭に置きながら進められねばならない

であろう。さらに近代化の影響を受けつつも伝統スポーツ形態を維持し、権力に抗する「力」は残されていることは新たな視点として加えたいと思う。

もともと『ヨーロッパ』はギリシアに本拠を置くキリスト教オースドクスのビザンツ帝国とイベリア半島に進出してきたイスラム勢力とに対抗し、カトリック・ヨーロッパとして自己規定している」のであり、「自己の正当性を作り出すために『歴史』が掘り起こされ、『世界史』が構想された」という²⁹⁾。その既定路線からはみ出することは普遍（＝カトリック）を持たないということも内包されているのである。テニス球戯史は世界史の中では地方史に該当する。それを中心に据えることで普遍を創り出そうとしたのではないか。ペロタ球戯を除外しながらテニス球戯を定位していく過程には、すでにある種の隠蔽や排除が働いているのである。

「いかに生きるか」を目指すスポーツ史

「抵抗としてのスポーツ」は、あからさまな対立構図をみせず表面的には温厚な競技であっても、その奥義には「抵抗」としての意味が内包されているとすれば、少数民族がこれまで維持してきた歴史や意味に接近できるであろう。単なる文化保護政策の枠内に収めるのではなく、生き延びる手段として常に伝統スポーツと対峙しているといえる。例えば琉球空手と琉球舞踊との関係や、格闘技及びダンスとしてのカポエイラは典型的な例である。バスク伝統スポーツやマキル・ボロカの歴史は、無意識の「連続性」を指し、「根」を絶やさず、統治に対抗する力を保持して、「いかに生きるか」を模索されたプロセスと言えるのではないか。

EU、スペイン及びフランス内で生きているバスク人に伝承されている伝統スポーツの歴史を述べることは、現在進行形のフクシマ、オキナワ、原発問題、東京2020などを含む世界の諸問題とどのように向き合うかも同時に表出されることになる。筆者はマスターナラティブに依存するのでは

なく、排除・隠蔽された「意図」を明確にしながら「現在」を把握し歴史を叙述することが必要であると考えられる。つまり哲学・思想をベースにしたスポーツ史の構築が求められるのである。

※本論は下記原稿を加筆・修正したものである。

「グローバル化統治に抗するバスク伝統スポーツ」竹谷和之編『神戸市外国語大学 外国学研究91 ポスト・グローバル化社会におけるスポーツ文化研究』神戸市外国語大学外国学研究所、2015年

注

- 1) スペインの行政区分では王政復古後の1979年にバスク自治州が認められた。一方フランスバスクの3地方という区分は旧体制下でのものであり、現在はピレネー・アトランティック県の一部である。フランス革命以前の地理的採用には政治的選択があると言われている。
- 2) イカストラでは母語であるバスク語で授業が展開されるが、スペイン語も同時に扱えるバイリンガルが一般的である。母語での思考を重要視する教育政策には「根」を絶やさないという意味が込められている。しかし、イカストラに通学しないバスク人の児童はスペイン語をコミュニケーションツールとする。
- 3) スペイン内戦（1936～39）で激しく抵抗したのはバスクであった。とくにビルバオ市のアルチャンダという山頂には、フランコ軍を執拗に悩ました共和国軍兵士100名あまり氏名が彫られたパネルと、ビルバオの象徴である鉄のモニュメントが設置されている。
- 4) 「単純で華やかさのすくないスポーツ」といいつつも、ペロタに固執する民族性に眼差しを向けている。司馬遼太郎『街道を行く22 南蛮のみち I』朝日新聞社、1988年、179頁。
- 5) Gillmeister, H., *Kulturgeschichte des Tennis*, Wilhelm Fink Verlag, 1990.

- ハイナー・ギルマイスター著、稲垣正浩・奈良重幸・船井廣則訳『テニスの文化史』大修館書店、1993年
- 6) Gillmeister 1990 P.32, ギルマイスター1993年22頁。
- 7) 「1331年2月22日、王の命により王室宮嬪係ベドロ・デ・オライスにパンプローナ修道院に素手のゲーム用の観客席を建設させた」これはスペイン・ナバラ県パンプローナ市王宮古文書室に保管されている。
竹谷和之「テニス球戯史研究とペロタ・バスカー1331年の文書から」『神戸外大論叢』第48巻第4号、神戸市外国語大学研究会、1997年、47-59頁。
- 8) 竹谷和之「バスク地方のペロタ球戯と教会16・17世紀の古文書を中心として」、井上邦子・松浪稔・竹村匡弥・瀧元誠樹編著『スポーツ学の射程 「身体」のリアリティへ』黎明書房、2015年、144-152頁。
- 9) 稲垣正浩「テニス球戯起源論とペロタ球戯（バスク民族）の関係について-H. ギルマイスターの仮説批判、その1-」『スポーツ史研究』第10号、スポーツ史学会、1997年、23-40頁。
- 10) Bombín Fernandez, L., Bozas-Urrutia, R., *El gran libro de la pelota* Tomo I, II, Deporte Universal, 1976.
- 11) パンプローナ市に居住するペロタ球戯史研究第一人者オリャキンディア氏もテニスとペロタとの関係を重視するが、あえて結びつけることはしない。
Ollaquindia, R., *El juego de pelota en el "tesoro" de Covarrubias, Cuaderno de Etnografía y Etnografía de Navarra*, N.60, Gobierno de Navarra, 1992, pp.289-294.
- 12) Aguirre Franco, R., *Deporte rural vasco*, Txertoa, 1983, pp.20-22.
- 13) Aguirre Franco, R., *Gure Herria juegos y deportes del país vasco I*, Kriselu, 1989, pp.38-41.
- 14) マルセル・モース 吉田禎吾／江川純一訳『贈与論』筑摩書房、2009年
- 15) 竹谷和之「グローバル化統治に抗するバスク伝統スポーツ」『外国学研究91 ポスト・グローバル化社会におけるスポーツ文化研究』神戸市外国語大学外国学研究所、2015年、5～20頁。
- 16) Iztueta, J.I., *Guipuzcoaco dantza gogoangarrien condaira edo historia, beren soñu zar eta itz neurtu edo versoaquin*, Donostia, 1824, pag.181.
- 17) ジェームズ・C・スコット著、佐藤仁監訳、『ゾミア 脱国家の世界史』みすず書房、2013年、338～343頁。
Scott, J.C., *The Art of Not Being Governed An Anarchist History of Upland Southeast Asia*, Yale University Press, 2009.
- 18) 同上書、237頁。
- 19) 土佐弘之『野生のデモクラシー 不正義に抗する政治について』青土社、2012年、274～282頁。
- 20) ジェームズ・C・スコット、2013年、339頁。
- 21) 同上書、342頁。
- 22) 「力」という表現の曖昧さに潜む「混沌」に目を向けることで、「力」を共有する社会への接近が可能となる。真島一郎「呪術と精霊の渦巻く格闘—コートジボワール・ダン族のレスリング」『スポーツロジ』第3号、21世紀スポーツ文化研究所、2015年、7～27頁。
- 23) ジョルジュ・バタイユ著 中山元訳『呪われた部分 有用性の限界』筑摩書房、2008年、68～82頁。
- 24) ベネディクト・アンダーソン 白石隆・白石さや訳『想像の共同体 ナショナリズムの起源と流行』リプロポート、1995年。
- 25) 西谷修『世界史の臨界』岩波書店、2000年、56～57頁。
- 26) 同上書、56頁。
- 27) 同上書、58頁。

- 28) 今福はメキシコ滞在中に成人儀礼に参加し、その「観察的参加」について言及している。その際、まず文化を内に書く行為＝身体化 (inscribe) を行い、その後外に書く＝記述 (describe) する重要性を説く。歴史叙述とのスタンスは同じであり、自らの哲学・思想が反映されなければ記述は成立しないという。稲垣正浩・今福龍太・西谷修『近代スポーツのミッションは終わったか 身体・メディア・世界』平凡社、2009年、196～202頁。
- 29) 西谷修、2000年、207～212頁。

参考文献

- Aguirre Franco, R., *Deporte rural vasco*, Txertoa, 1983.
- Aguirre Franco, R., *Gure Herria juegos y deportes del país vasco I*, Kriselu, 1989.
- 稲垣正浩「テニス球戯起源論とペロタ球戯 (バスク民族) の関係について - H. ギルマイスターの仮説批判、その1 -」『スポーツ史研究』第10号、スポーツ史学会、1997年
- 稲垣正浩・今福龍太・西谷修『近代スポーツのミッションは終わったか 身体・メディア・世界』平凡社、2009年
- 井上邦子・松浪稔・竹村匡弥・瀧元誠樹編著『スポーツ学の射程 「身体」のリアリティへ』黎明書房、2015年
- Iztueta, J.I., *Guipuzcoaco dantza gogoangarrien condaira edo historia, beren soñu zar eta itz neurtu edo versoaquin*, Donostia, 1824.
- Ollaquindia, R., El juego de pelota en el “tesoro” de Covarrubias, *Cuaderno de Etnografía y Etnografía de Navarra*, N.60, Gobierno de Navarra, 1992.
- Gillmeister, H., *Kulturgeschichte des Tennis*, Wilhelm Fink Verlag, 1990.
- 司馬遼太郎『街道を行く22 南蛮のみちI』朝日新聞社、1988年
- シモーヌ・ヴェイユ著 富原真弓訳『根をもつこ
と(上)(下)』岩波書店、2010年
- ジェームズ・C・スコット著 佐藤仁監訳『ゾミア 脱国家の世界史』みすず書房、2013年
- ジョルジュ・バタイユ著 中山元訳『呪われた部分 有用性の限界』筑摩書店、2008年(初版2003年)
- Scott, J.C., *The Art of Not Being Governed An Anarchist History of Upland Southeast Asia*, Yale University Press, 2009.
- 竹谷和之「テニス球戯史研究とペロタ・バスカー1331年の文書から」『神戸外大論叢』第48巻第4号、神戸市外国語大学研究会、1997年
- 竹谷和之「グローバル化統治に抗するバスク伝統スポーツ」『外国学研究91 ポスト・グローバル化社会におけるスポーツ文化研究』神戸市外国語大学外国学研究所、2015年
- 土佐弘之『野生のデモクラシー 不正義に抗する政治について』青土社、2012年
- 西谷修『世界史の臨界』岩波書店、2000年
- ハイナー・ギルマイスター著、稲垣正浩・奈良重幸・船井廣則訳『テニスの文化史』大修館書店、1993年
- ベネディクト・アンダーソン著 白石隆・白石さや訳『想像の共同体 ナショナリズムの起源と流行』リプロポート、1995年(初版1987年)
- Bombin Fernandez, L., Bozas-Urrutia, R., *El gran libro de la pelota* Tomo I, II, Deporte Universal, 1976.
- 真島一郎「呪術と精霊の渦巻く格闘 - コートジボワール・ダン族のレスリング」『スポーツロジイ』第3号、21世紀スポーツ文化研究所、2015年
- マルセル・モース著 吉田禎吾／江川純一訳『贈与論』筑摩書房、2009年